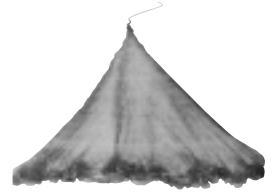


財団だより

多摩川

2003. 3 第97号



マルタ投網
川辺昭吉朗蔵



東急ゴルフ場の渡し舟・第三京浜多摩川橋下流 ('03.2.13)

■多摩川現風景■

(53) 多摩川の「渡し」

多摩川の「渡し」は明治初年には青梅から羽田の河口までに39ヶ所あって、最後まで残ったのが昭和48年に廃止された「菅の渡し」であった。(多摩川誌による) 現在、昔の渡しの面影が見られるのが東急ゴルフ場が運営している、ゴルフ客を乗せて対岸のゴルフ場を往復している渡し舟がある。場所は現在の第三京浜多摩川橋下流で昔の野毛の渡しがあった付近である。

多摩川の渡しについて当財団の研究助成成果(1981年・石井作平)に「野毛の渡し」の記述がありますので抜粋して紹介します。

多摩川の流れの変遷によって、ひとつの村が分断され、兩岸に同じ地名が残っているところが、下流域にはたくさんあります。古川、古市場、丸子、沼部、等々力、瀬田、宇奈根、布田...、野毛もそのひとつです。「武蔵野歴史地理」は万治(1658～61)以前の多摩川の氾濫によって南北にへだてられたのではないかと推察しています。

川崎側の下野毛は、荏原郡玉川村に属していたが野毛の飛び地だったところで、「新編武蔵風土記稿」に

は「多摩川の向ひに十三軒住す」とあります。したがって野毛の渡しはその作場渡しとして設けられたものです。

下野毛はいま工業地帯となっていますが、昭和30年ごろまでは渡しを利用して本村の方へ野良仕事に行く人がいたということです。

・関連する財団の研究助成

<学術研究>

① 多摩川における応用地理学的研究

—流域開発に伴う多摩川の水環境の史的変遷—

1977年 市川 新 東京大学 (No.3)

② 多摩川・隅田川両水系の浮世絵による利用行為を軸とする比較研究

1989年 長屋静子 (株)アルゴ 都市設計 (No.134)

<一般研究>

① 多摩川流域平野の地理学的研究

—地形分類と渡河点との関連について—

1979年 内山和子 都立福生高校 (No.4)

② 橋梁による多摩川の地域文化の変貌と環境破壊の調査研究

1981年 石井作平 たまがわこども文化の会 (No.14)

多摩川散歩

■玉川上水散歩マップ■

羽村市郷土博物館 宮沢 賢臣

玉川上水は、現役の上水施設という面以外にも、沿線は貴重なグリーンロードとして散策路が整備され、都民の憩いの場となっています。羽村市教育委員会では、以前から散策に関する地図やパンフレットがないかというお問い合わせをたくさん頂いていました。それぞれの自治体区域では案内地図などもありましたが、取水口のある羽村から下流の統一した地図は、自治体が発行するガイドブックとしてはありませんでした。そこで、どうせ作るなら、取水堰のある羽村市が作るべきではないかと考え、平成8年に企画を通し、市民参加による散策マップを作成することになりました。

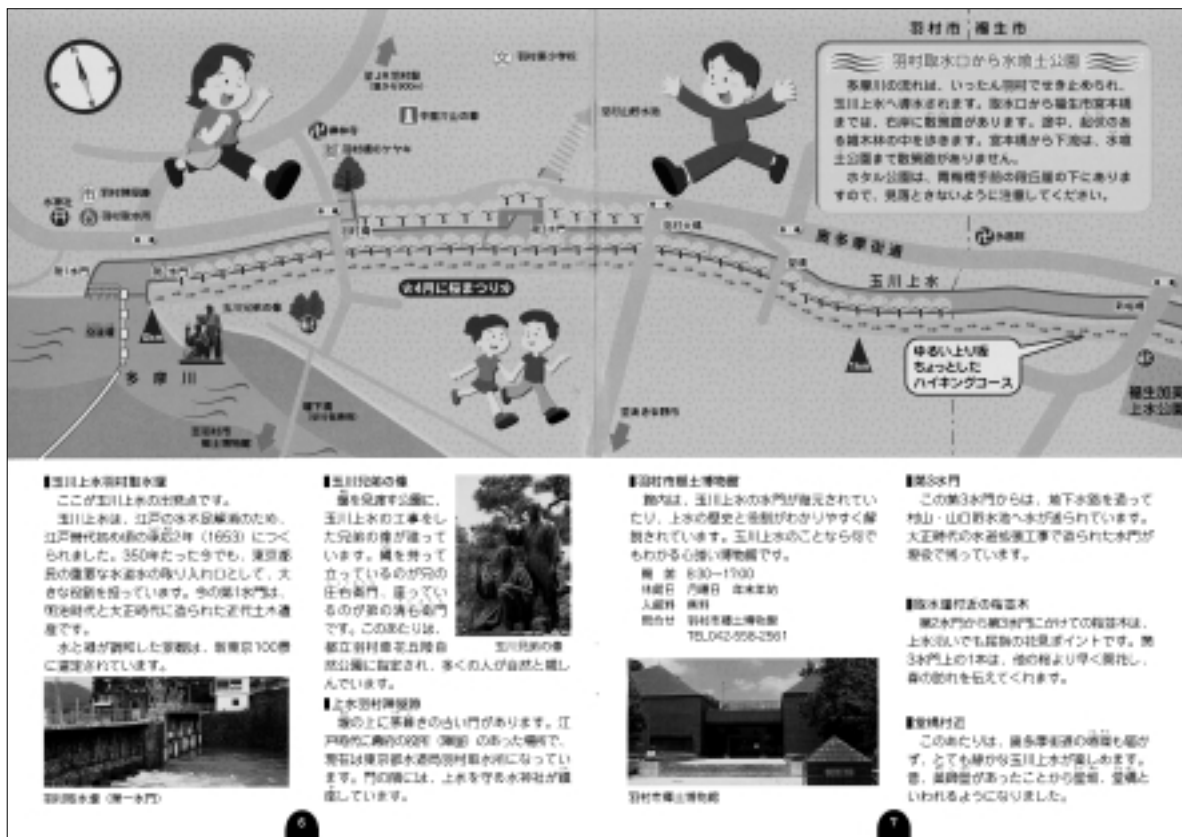
平成9年度に羽村市民より編集委員を募集し、マップの体裁をどうするかから議論をはじめました。編集委員となった8名の市民は、サラリーマンを退職された方や自然観察・散策愛好家、フリーライター、グラフィックデザイナー、主婦などさまざまな分野から集

まり、編集会議では行政の枠を越えたたくさんのアイデアが飛び交いました。また、実地踏査も頻繁に行い、そのイメージをふくらませました。そして、散策に有効な地図情報と、付近の写真を含めた解説を上下2段にして、携行に便利のように簡易な冊子とすることで作業を進めていきました。範囲は開渠部分の終点である杉並区浅間橋までとしました。こうして、平成10年度末に集大成「玉川上水散歩マップ」が完成しました。

1冊500円で頒布を開始したところ、半年足らずでほぼ完売状態となってしまい、玉川上水の人気の高さを思い知らされました。その時から再版を望む声が高かったのですが、反面、内容の誤りを指摘いただくこともあり、その内容を再確認して、玉川上水開削350周年記念プレ事業として、平成14年9月に改訂版を発行しました。

ご希望の方には1冊500円で羽村市役所と羽村市郷土博物館で頒布しています。郵送をご希望の方には、送料ご負担頂きお送りいたします。

詳しくは羽村市郷土博物館（電話 042-558-2561）までお問い合わせ下さい。



▲玉川上水散歩マップ（改訂版）一部分ー

私と多摩川



東横線鉄橋と筆者（1937）

明治大学名誉教授 江波戸 昭

中学生（旧制）のころ（1944～7）、生物班に籍を置いていた。花よ、虫よ、鳥よと追い廻していたのだが、なにせ、戦中から戦後の不自由なひもじい時代、汽車の切符は簡単には買えないし、泊るには米を持って行かなければならないとあって、当然、行動範囲は地元周辺にほぼ限られていた。幸いなことに、幼少時の1935年から田園調布に住みつくことになったので、すぐ近くの多摩川台公園（当時は亀甲山と呼んだ）から、その下に広がる当時日本一の“温室村”、そして前面の多摩川原にかけての一带がその格朽の対象地域となった。このわがふるさとの地は、名のとおり“田園”にあふれていたのである。

空襲下、そして終戦直後、まともな授業ができなかったころ、今でいう部活がなよりの学びの場で、それをよいことに、毎日のように捕虫網を手し、胴乱を肩にかけ、草履や下駄ばきあたりを掛け廻った。このあたり戦前から風致地区に指定されてはいたが、整備どころでなかったそのころは、亀甲山はジャングル同然、小学生には兵隊ごっこや探険ごっこの場で、古墳というだけに、骸骨があるぞ、首吊りがあるぞと脅かされ、夕暮れ後はとても近付けない肝試しの場だった。山を降りたところの六郷用水から温室村にかけては水溜が多く、水生植物、水棲昆虫の宝庫だった。カーネーションやスウィートピーの温室用の水槽に一步踏みこむと、マツモムシにちくりとやられてあわてて跳び出す始末、用水にはカワトンボ、イトトンボ、カゲロウ類がひらひら舞っていた。

1934年に丸子橋が、ついで36年に日本最初とさ

れる海水防水堰が東横線鉄橋（渡月橋といった）の下に造成されて、その上流の温室村の前面の川原は砂礫が堰止められたためか、大小の円礫の堆積した洲となって、水鳥の楽園を形成していた。なかでも最も多く群をなしていたのがコチドリとコアジサシだった。悪童たちは卵や雛を観察しようと礫の間を探し廻ったが、保護色のためか、まずはみつからず地団駄を踏むばかりだった。川の水はもちろん澄んでいて、フナだのコイだのと釣れたが、堰が出来てからは海水と遮断され、ボラやマルタ（ウグイ）は登ってこなくなって、釣人の姿は減じつつあった。二子玉川にかけてはかつての砂利採取の場とあって、“危険、遊泳禁止”の立札が立てられてもいた。

多摩川の土堤から用水、そして亀甲山周辺の崖にかけての一带は山菜の宝庫でもあった。食糧難の当時は、家庭菜園とともに、この自然の恵みに助けられたものだ。生物班にいたのも幸いした。食べられるものが、いつ、どこにあるか、つぶさにご存知できたからだ。早春からフキノトウが、ついでツクシが芽を出し、ヨモギ、ヨメナ、タンポポ、ノビルなど、芽ものではサンショやタラノメから秋のムカゴまでとり放題だった。今では多摩川台は人工的に整備され、温室村は消えて宅地が造成され、川原や土堤は踏み固められて、これらの宝庫はまったく姿を消してしまった。まさに“田園荒れなんとす”である。

私の手許に、生物班時代の1946年、レポートとしてとりまとめた「田園調布で採集された甲虫（鞘翅目 Coleoptera）のリスト」という記録が残っている。そこにはなんと、甲虫類だけで275種の名がリスト・アップされ、採集年月日も記されている。こんな虫がこの地に棲みついていたのか、と驚かされるものが多い。現在、追跡調査したら50種もみつからないのではと思われる。川原にあふれていたコアジサシは、羽田あたりの人工的孵化場で辛うじて種を保存しているというのだから。

とくに高度経済成長以後、田園調布というコミュニティは街自身からして激変した。それはこの社会をとりまく自然界の変貌とも歩を一にしている。たしかに、一時よりは多摩川自体は浄化されはしたが、かつての人間と自然との相互享受の関係はほとんど戻ってはこない。そのあたり興味ある方は拙稿「郷土誌 田園調布」に目を通していただければ幸いである。

環境雑感

■野生鳥獣に見る時代の変化■

増井 光子

昨年の夏は普段見慣れない野生の鳥獣が人前に現れて、私たちが驚かせたり楽しませたりしてくれた。私はよこはま動物園長の傍ら、兵庫県立の Kou no Tori の郷公園長も務めている。ここはかつて日本全土でみられた Kou no Tori の、最後の生息地であった但馬地方に再導入を計画推進している施設で、現在101羽の Kou no Tori を飼育している。

Kou no Tori は水辺の鳥なので、その復活のためには湿地の確保や水生物に富む河川が不可欠である。しかし現在はかつて湿地だったところも干拓されたり、水田も圃場整備が進み、水生物が年間を通して棲息できる環境とは程遠くなっている。また河川も治水のために三面張りとなっている所が多い。Kou no Tori の再導入にはこうした環境を多自然型のものに、変えて行かねばならない。地元の豊岡市では半世紀近い年月をかけて、その保護活動に取り組んできたのであるが、その努力が実ったか昨年8月5日の午後、1羽の野生 Kou no Tori が郷公園に舞い降りて、住み着いたのだ。再導入計画は話としては理解できても Kou no Tori が空を飛ぶというイメージは、飼われた鳥だけみていたのではなかなか湧きにくい。それが野生の鳥が飛来することによって形として認識され、一気に現実味を帯びてきた。Kou no Tori が但馬の空を舞うのは32年ぶりのことである。当然ニュースとなって多くの人の知るところとなった。そして郷公園には一目野生鳥を見ようとこれまでになく人が訪れるようになった。

そうした折、東京でも思いがけない訪問者が多摩川にやってきた。ご存じのアゴヒゲアザラシである。Kou no Tori に2日遅れてやってきたこの若いアザラシは、現れた川にちなんでタマちゃんの名付けられ、大変な人気者となった。マスコミは連日タマちゃんを追いかけて、真夏の川岸に連日1000人もの見物客が集まった。当然タマちゃんをどうするかが話題となったが、大方の意見はそのままに経過を見ようというものであった。

この東西の野生鳥獣に対する人々の反応を見て、時代の変化を強く感じた。北方の海獣類はこれま

でも時々南下してくることがあった。40年ほど前にも、トドが東京湾から荒川に迷入してきたことがある。しかしその時の人々の反応は、タマちゃんに対して示したような好意的なものではなかった。水上警察署から動物園に捕獲協力の依頼があり、警備艇がトドを追いかけてまわしたのである。結局このトドは捕獲されずそのまま海へでてしまったが、その当時の世間の反応は見慣れない野生動物は即刻捕獲して、目の前から取り除くことを望んでいるようであった。

ところが今は多くの人々は、野生動物との共存を望んでいる。タマちゃんは今は多摩川から横浜市内を流れる帷子川に居を移し、時々顔を見せている。もうタマちゃん存在が大きなニュースになることもなくなった。タマちゃんはそこにいるのが当たり前となり、市民権を得たとみなされよう。

Kou no Tori の郷公園は一部を公開しているが、飼育しているのは Kou no Tori だけ一種である。場所も兵庫県の北部に位置し、交通の便も善くはない。しかし1999年の秋に開設されて以来、見学者の数はずっと右肩上がりである。特に野生鳥がきてから見学者の数が今年度は14万人を超えようとしている。それはとりもなおさず人々の自然嗜好の高まりを表しているといえよう。Kou no Tori やタマちゃんの出現を機に、彼らの生活の場である水環境の保全に関心が高まることを期待したい。

筆者プロフィール

増井 光子 (ますい みつこ)

よこはま動物園 園長

■略 歴

1937年生まれ。

麻布獣医科大学(現麻布大学)獣医学部卒業、上野動物園、多摩動物公園、井の頭自然文化園長、多摩動物園長、上野動物園長、東京都建設局参事(世界水族館会議担当)麻布大学獣医学部教授を経て1999年より現職

■主な団体職

(財)とうきゅう環境浄化財団選考委員

日本自然保護協会評議員

世界自然保護基金日本委員会評議員

■専 門

獣医学・動物行動学

■主な著書

「日本の動物」(小学館)

「動物が好きだから」(どうぶつ社)

「動物のいのち」(筑地書房)

財団からのお知らせ

研究助成特定研究の紹介

「密集放置人工林における水循環特性と生態系について」

森林は雨水を吸収し水源の枯渇や河川の氾濫を防ぐ働きがある。1950年代以降、水源林となっていた山間部の自然林を伐採し、スギ・ヒノキ等の大規模な植林が全国各地で行われた。しかし、廉価な輸入木材の流通により長期にわたる木材価格の低迷と労働コストの増大によって、山村は過疎化、高齢化が進み林業は衰退を続けている。この結果、人工林は枝打ち、間伐等の手入れが行き届かず放置林が増大した。過密状態の人工林は日照不足で下草が生えず保水機能の低下や生態系への影響が悪化し憂慮すべき事態となっている。これが平常時における河川流量の減少やクマ・イノシシ・シカ・サル等の野生動物が畑の作物を荒らす原因の一つであると言われている。当財団では平成13年度より選考委員の先生方の推薦と厳正な審査のもとに特定研究としてあきる野市五日市の人工林地域（約20ヘクタール）における水循環と生態系に関する研究を助成している。特定研究の中間報告書にもとづいて概要を紹介いたします。

課題「生態系維持基盤としての流域特性と水循環特性に関する研究—スギ・ヒノキ放置林伐採前後における比較—」

代表研究者 千葉大学理学部教授 佐倉 保夫

1. 調査・試験研究のあらまし

昭和30年代前半から始まる高度経済成長により、玉川上水をはじめ、多摩川流域の中小河川の水環境にも大きく及び、流域の正常な水循環は阻害されていった。そして、それに起因するビオトープの衰退は、さらなる人間の介入により、生物的要素、種数、個体数の減少などの現象として、拍車がかけてきたといえる。現在、人の社会システムを持続性のある社会に近づける視座をえることが急務となっている。その持続性は循環によつて支えられ、その循環は水の運動と生物の多様性によって支えられている。本研究は典型的なスギ・ヒノキの密集放置人工林流域を選び、水分、土壌、地質、地形、水質等の生態系の基盤、及び植生、動物、微生物から構成される共存体の時空間分布を明らかにし、更に森林伐採による攪乱に対する生態系の反応、変化する水循環に対応する生態系のメカニズムを解明し、望ましい循環系の回復のための基礎的な知見を得ることにねらいを定めた。

2. 調査・試験研究の進捗

本研究は、長期野外調査区を設けて、自然生態系の総合的理解を目指している。時空間ユニットとしては森林流域を考え、流域研究の最も基礎となる水収支要素としての降

水量、流出量、土壌水分量などの水文連続定点観測と降雨、河川水の水質分析から物質循環や基本的な昆虫や水生生物など生態要素調査と平行にして実施している。具体的にあきる野市五日市の森林等において水循環に関する観測施設を設置し、生態系調査と共に、3年間観測を続けている。定点観測としては、現在、溪流の水量観測施設（3ヶ所）、林内雨観測（4ヶ所）、樹幹流（4ヶ所）、林外雨量観測（2ヶ所）、土壌水分観測（TDR連続自記計測：1ヶ所、テンシオメータ目視観測：12ヶ所）、地下水位観測（1ヶ所）に各測器を設置し計測を行っている。

それに基づいて、山間部の水収支計算を行う。一方、土壌採水装置などを利用し、水質調査（雨、溪流、地下水）から流域の物質循環特性を把握する。さらに、流域内の生態系基盤要素としての地形、土壌、地質調査及び動植物などの時空間分布に関する調査を行っている。2001年9月から上記の計測を順次開始し、データも蓄積されつつある。2002年9月からヒノキ、スギ林、雑木林、裸地化斜面の3つの斜面で、テンシオメータによる土壌水の観測を開始した。2003年度は植生の異なる斜面における土壌水の挙動の違いが明らかになる予定である

3. 調査・研究の組織

研究者名	研究分担	所属・専門
佐倉 保夫	総合調整	千葉大学教授・水文学
大沢 雅彦	流域生態系調査	東京大学教授・生態学
唐 常源	地下水	千葉大学助教授・水文学
町田 功	観測機器管理	千葉大学研究員
樽 良平	土壌調査、 昆虫調査 伐採、現場管理	地質、化石研究家
大橋 毅	気象、植物調査	酸性雨、蘚苔類研究
飯田 輝夫	他流域データ収集	地下水・水循環
星野 義延	地域生態システム 調査	東京農工大学助教授・ 生態学

4. 今後の調査・試験研究の計画

平成15年度（最終年度）：14年度に引き続き、流域の一部の森林1ヘクタール程度を伐採し、比較流域を設立する。調査項目は14年度と同様である。水収支、物質収支、動植物の時空間変化などから、森林伐採による生態系の変化前兆を把握し、その後の継続研究のための布石とする。

《寄贈文献の紹介》

● 「郷土誌 田園調布」

編集発行 (社) 田園調布会
2000年 中央公論事業出版

総頁370頁の大半を第1部「田園調布のあゆみ」を江波戸 昭氏が執筆し、田園調布の生い立ちから現在までの80年の歴史を住宅開発の変遷と住民生活の移り変わりを貴重な資料と写真を掲載しまとめている。大正7年渋沢栄一翁が理想的な住宅開発をかねて田園都市(株)を設立し、11年に分譲開始し住民第1号となったのが、牧師の小平國雄氏であったとの記述が印象に残る。

● 「生態学からみた身近な植物群落の保護」

監修者 大澤雅彦 編者 (財) 日本自然保護協会
2001年 (株) 講談社

植物群落の定義、成り立ち、動物との相互作用等の解説。日本における植物群落の保護、管理、復元等について、「武蔵野の雑木林の管理」「東京都多摩川河川敷のカワラノギク群落」「神奈川県舞岡公園における谷戸の保全」等29ヶ所の事例を紹介している。資料として、「植物群落RDB」優占群落リストを掲載している。

● 「里山の生態学」

編者 広木詔三
2002年 名古屋大学出版会

本書は東海地方の樹木の分布並びに里山の指標としてトンボ類、ギフチョウ、植食性昆虫、カケス、爬虫類、菌根菌類等を調査し、生態系の関連を解明された。里山の変遷も解説し、保全については全国の事例を紹介し将来のあり方を提言している。20名の専門家が分担している。

● 「市民のための風景読本—風景考—」

著者 進士五十八・畦倉実
写真 上田頼人
2002年 マルモ出版

前編は進士氏の「私の景観論」として都市景観13編、田園(農村)景観8編、自然景観14編、歴史景観15編、後編は畦倉氏の19編が収録され、両氏の景観論がエッセイ風に展開されている。特に後編は上田氏の写真が見開き左頁に掲載され写真集としても楽しめる。

● 「環境市民とまちづくり① 自然共生編」

編集代表 進士五十八
2002年 (株) ぎょうせい

市民(団体)と行政によるパートナーシップによる環境保全活動を、野鳥保護、谷戸の保全、雑木林の保全、減農薬運動、里山の保全、トンボ沼の保全、川での自然体験活動等14の実践例を各々市民団体が寄稿し紹介している。市民団体の立ち上げ、会の運営、行政への働きかけ等市民活動のノウハウの詰まった一冊である。

● 「多摩川下流の植物(六郷川の河原の野草)」

著者 古屋のり子
2002年 自費出版図書館編集室

著者が1994年から2001年の7年間に亘り多摩川下流(河口~8km)両岸の野草スケッチを積み重ねた350余種を本書に収録し、各々の野草の名前、特徴、見分け方等を簡単に解説したミニ植物図鑑ともいえる書である。カラーでないのが残念に思う。

- 発行日 平成15年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団

〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03) 3400-9142

FAX (03) 3400-9141

ホームページ <http://www.246.ne.jp/~tokyuenv/>

*印刷所 雄文社 〒336-0001 さいたま市常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125

